

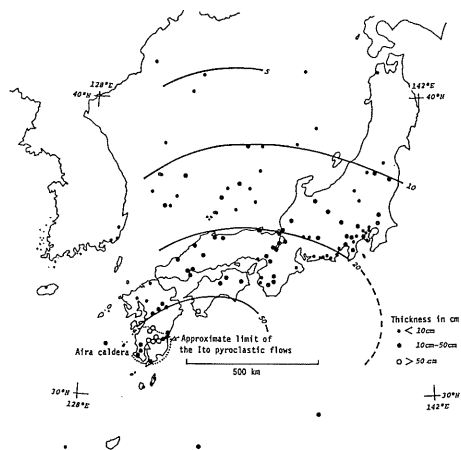
〈ニュース〉

## 山形でも発見された<sup>あいら</sup>始良（鹿児島県）の火山灰

山野井 徹\*

火山が噴火するときその噴煙は高所まで達することが多い。噴煙には水蒸気のほかに多量の火山灰が交っている。それが偏西風などにのると、かなり遠くまで運ばれることもある。このような火山の爆発があると、その火山灰は広域に飛散し、そして降下、堆積するため、地質学的には鍵層として重視されることが多い。こうした火山灰のうちでも特に広い地域にわたって分布する火山灰は「広域テフラ」と呼ばれ、第四系の編年にとっては貴重な存在となっている。過去の火山活動によるこうした広域テフラは、これまでに白頭山(北朝鮮、800～900年前)、鬼界島(鹿児島県、6,300年前)、鬱陵島(韓国、9,300年前)、始良(鹿児島県、21,000～22,000年前)などが知られている(町田・新井, 1983)。このうちとくに始良カルデラのテフラは分布が広く、ATと略称され、これまでに第1図のような分布が知られていた(町田・新井, 1983)。

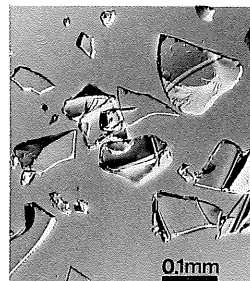
山形県では上にあげたような広域テフラは未発見であった。しかし第1図のATの分布は山形県内でも適当地層があれば、ATが存在する可能性のあることを示している。



図一 始良火山灰の分布(町田・新井, 1983)

今回、山形大学が村山市浮沼で実施したボーリングのコア(山野井, 1985参照)を詳しく見直す機会があった。この際、地表深度9.6m付近のシルト層中に数cmの厚さで介在されている火山灰について、上記のATの存在の可能性といった観点から検討してみた。この層準付近の花粉化石はトウヒやコメツガなどの亜高山性の樹木を主体としており、氷期の堆積物である。またこの火山灰下20cmには含まれる木片の<sup>14</sup>C年代は23,560年前であった。この年代は、測定誤差を考慮に入れば、ATの時期と調和するものである。AT粒子の形はその90%以上を占める火山ガラスでは、鋭い端をもつ平板状のガラスで、気泡の側壁あるいは泡と泡とのつぎ目の部分にかけらであるという(町田・新井, 1976)。浮沼のコア中の火山灰の粒子の形態は上記ATの特徴そのものであった。

このように浮沼のコアの中からATを発見できたが、しからば他地域のコアにもなかりうかとさがした結果、白竜湖岸での地表下19.5mの層準に発見することができた。今後注意してコアを読むなら県内各地から見つかるはずである。ATの肉眼的な特徴は、白色のサラサラとした分級度の良い細粒の火山灰で、ガラス質が多いため細かくキラキラ光ることを特徴としている。テフラの厚さは5cm未満と考えられる。埋積深度は場所によって異なるが、20m以浅が多いであろう。山形盆地ではATの降下時期には広く湖が存在していたので、湖成層であるシルト中に介在されている可能性が高い。このテフラが見つかった場合、その年代が約2万年であるので、その深度の半分が約1万年となり、洪積/沖積層の境界の目安として役立つ。



図二 浮沼の始良火山灰粒子の顕微鏡写真

\* 山形大学教養部地学教室

発見された方はぜひ御一報をお願いしたい。